



鉄の歴史 鉄の人物史-4

浅田長平

村上弘樹
Hiroki Murakami

(株)神戸製鋼所 鉄鋼カンパニー
生産技術部 企画担当次長

Chohei Asada

1 はじめに

今から20年くらい前になるが、新入社員教育の中に梅田コマ劇場で「海鳴りやまず」の観劇があった。たまたま上演時期のタイミングが良く、会社のルーツを勉強させるのにはちょうど良い企画であるが、今にして思うとまだ余裕のあった良き時代の話である。さて、この舞台の主人公は、当時世界最大の商社である「鈴木商店」の大番頭金子直吉であり、確か藤岡琢也が演じていた。最後のクライマックスは、台湾銀行からの融資打ち切りで鈴木商店が倒産する場面で、金子直吉が神戸の山の手から海を見てこう叫ぶシーンだ。「あの火を見ろ！ 鈴木が無くなっても神戸製鋼所の火は赤々と永遠に燃え続けるだろう！」この時、2階席に居た我々新入社員からの大きな拍手がいつまでも鳴り止まなかったことを今でも鮮明に記憶している。この舞台にもなった親会社である鈴木商店が倒産するという一大事を、師匠である田宮嘉右衛門(後の神戸製鋼所第5代社長)とともに乗り切り、まさに神戸製鋼所(以下、神鋼と略す)の赤い火を守り続け、また戦中・戦後の混乱期を役員・社長として先頭を走り、「神鋼 中興の祖」と呼ばれた鉄の男が『浅田長平』(図1)である。

浅田は昭和20年から昭和33年まで、神鋼で第6代および第8代と7年間に渡り社長を務め、特に線材を主体とした鉄鋼業の発展に多岐に尽力した。その後、(社)日本鉄鋼協会会長に就任し、学会基礎の充実を説き協会の拡充強化にも多大な努力を払ってきた。彼の業績を称え、昭和46年には「浅田賞」が設立されている。

今回、浅田の生涯を振り返るに当たり、鉄鋼業の発展に尽くした業績はもちろんであるが、その魅力の一端にも触れてみたい。



図1 浅田長平

2 学生時代

浅田は明治20年4月15日の明け方、現在の大阪府堺市新在家町にて誕生した。近くに有名な禅寺があり、その鐘の音と同時に飛び出したと言われている。実家は肥料商を営んでおり、店の名をとって「帯長のボン」と呼ばれ何不自由のない少年期を過ごした。当時、高等小学校は堺市に1校のみで、あの与謝野晶子の母校でもあったが、長平は小さい頃から優秀で高等小学校でも常に優等1番の秀才だった。その後、大阪府立第2中学校も1番で卒業し、明治38年9月に京都の第三高等学校工科へ入学した。この年の9月といえば、日露戦争の終結に向けて外相小村寿太郎全權大使が交渉に当たっていた頃である。三高を卒業した後、京都帝国大学へ入学したが、専攻は理工科鉱石採鉱冶金であった。ここを選んだのは、単に製図が嫌いだったという単純な理由であり、本人も「手先は非常に不器用であった。」と回想で述べている。帝大の2年生の時、恒例というか必須単位である実習で生野銀山に約2か月間こもって坑夫と同じ作業を経験している。さて浅田が3年生の時、やはり実習があり他の学生が鉱山や銅山を選んだのに対して浅田

一人が何故か当時の官営八幡製鐵所を実習先を選んだ。このあたりが運命かも知れないが、彼の将来を決定する「鉄」との出会いであった。当時の八幡製鐵所は第1期の拡張工事を終えて年間20万トンの製鋼能力を有する大製鐵所であった。ここでの実習は主にルツボ工場で行い、その頃ルツボハガネと呼んでいた特殊鋼について勉強した。この後、卒業論文に取り掛かるが、テーマに「溶鋳炉」を選んだ。ここからの発想が浅田ならではの発想だが、溶鋳炉の卒論執筆のために、何と彼は朝鮮半島まで鋳石調査に単身出かけて行くことになる。日韓併合の調印が成ったばかりで、朝鮮半島が騒然としていた明治43年8月のことである。相当な反日感情の中で鋳石調査を行ったが、さすがに現地の憲兵が心配して自動小銃を持った護衛を付け、その横で調査を続けていたとのことである。当時の帝大生は国家公務員に準じた特別な存在であったことが伺えるエピソードである。朝鮮半島での鋳石調査を無事に終了した浅田は、帰国後卒論を一気に書き上げる。ここでまた面白い話があり、この浅田の卒論を、しかも完成前のものを是非買い付けたいという会社が現れた。卒論の青田買いであるが、この論文通りに事業を進めたいとの意向であった。この時、浅田自らがこの事業に乗り出しておれば、現在でいう学生ベンチャーの元祖になっていたかもしれない。元来の性格にもよるが、勤勉で粘り強く、また何よりも負けず嫌いな浅田の性格が反映された立派な卒論であったと想像出来る。これまでのところでは非常に真面目な印象であるが、結構遊び好きの学生でもあった。彼の回想では「周りの悪友に誘われて仕方なしに…」と書いてはいるが、例えばこんな話があった。八幡製鐵所で実習中、息子の長平から「金送れ！」の手紙しか届かず、全く近況を知らせて来ないのを心配した父親が、生活費を持って浅田の宿を訪ねたところ、その時もちょうど芸者相手に遊んでいたという。さすがに父親も呆れ果てて二の句が継げなかったらしい。当時の彼をご想像頂きたいが、やはり豪快磊落な人はいつの時代にも大人物である。一方、京都の下宿先のお嬢さんとの初恋もあり、母娘からは是非ともお婿さんに所望されたという花も実もある学生時代であった。



入社から戦争終了まで

3.1 入社時の様子

明治44年7月に京都帝大を卒業し、8月に神鋼に入社した。浅田24歳である。当時の月給は30円であった。今の価値で約25万円ぐらいだろうか。一般の社員と比べると大変な高給ではあるが、京大採鋳冶金科を同時に卒業した18名中、最下位の月給だった。本人は相当不満があり、あまり

入社に乗り気ではなかった様である。その頃の神鋼は海軍工廠の指導を受けて造船や造兵用鋳鋼部品を作り始めた時代であり、設備も5トンと8トンの酸性平炉のみであった。学生時代に実習した八幡製鐵所と比べて余りにも貧相な設備でありかなり失望していた。ただ、採用時の面接官が田宮であり、一発で合格したことも何かの因縁だったのであろうか、ここに神鋼の浅田長平が誕生したわけである。帝大卒の第1号工学士(技師)としての入社で、最初の辞令は溶解工場技師であった。ベテランの職人に指導されながら仕事を覚えていくことになるが、入社した年の12月に「第四師団 第三十七連隊」(大阪)に1年志願兵として入隊することになった。当時、徴兵は国民の義務であり、兵役検査の合格者は全て軍隊経験を積むことになっていた。帝大卒であるので士官候補生の道もあるが、浅田は早く兵役を終えるべく、あえて一兵卒の道を歩むこととした。厳しい兵役を1年間勤め、陸軍歩兵伍長で除隊となった。後々、酒の席でよく浅田が「会社は社長、軍隊は伍長」と話していたのは、この時の階級である。当時の日本を取り巻く環境は、辛亥革命で中華民国が誕生し、ヨーロッパでは第1次世界大戦が近づいてくる時代背景であった。軍隊で過ごしていた1年間は、当然会社での昇給も昇格もなかったが、翌年の新年会の席次で、「自分よりも後輩が上座に座っており非常に憤慨した。」と回想で述べている。彼は浅田に先駆けて海外にも出張しており、これにはさすがの浅田も大ショックを受けた様である。また、仕事の面での不満もあり、恩師の京都帝大斎藤大吉教授に会社を辞めたいと相談に行ったのもちょうどこういう時期であった。後に「神鋼中興の祖」と呼ばれ、戦時中から戦後の混乱期を切り抜けてきた鉄鋼業界の巨人にも、我々と同じ悩みや嫉妬があったことは、非常に人間味のある興味深い話である。後にこの時の模様を社内誌で「軍隊から職場に帰った時の私の給料が30円であったのに、後輩の者が5円追い越して35円になっていることを知った。私は腹が立ったが、なんとか1年の遅れを取り返そうと、技術の本はもとより、銀行、倉庫、経済とあらゆる本を読んで勉強した。今いろいろな人とも話をし、お相手ができるのはその頃の勉強のおかげであると思っている。」と語っており、若手の社員には仕事で面白くないことがあっても腐らず常に勉強しろと説いている²⁾。このすぐ後に浅田は少し変わった経験をする。それは、「鈴木商店 日本金属株式会社 日比製鍊所」の工場長として岡山県児島郡へ赴任したことである。ここで鉛や銅の製造に携わることとなる。これはあの金子直吉の大抜擢であり、その期待に多いに応えた時期である。浅田満30歳の働き盛りであった。だが、やがて経営は苦しくなり、浅田本人は2年後に復帰する。

3.2 初めての海外出張

岡山から帰ってきたばかりの浅田に吉報が訪れた。彼が入社の条件として提示していた海外出張が、やっと実現することになったのである。出張の目的は、スイスにある「ズルツァー社」でディーゼル・エンジンの製造技術を習得することであり、6名の団長として横浜港を賀茂丸で出航した。実習の対象となるのは潜水艦用の2サイクルディーゼル・エンジンで、450～2,000馬力のものであった。まず米国のシアトルを皮切りに東部諸州の13工場を視察、その後英国リバプールからロンドンへ移動し、大正8年の正月はロンドンで迎えることとなった。当時は第1次世界大戦の真っ只中であり、ロシア革命も起こるなど混乱のヨーロッパであったが、ちょうどパリでは講和会議が開会されていた。この後、浅田は勢力的に工場視察を行い、35か所もの工場を訪れている。この時、当時鋳鋼品メーカーでは世界の最先端であるフィッシャー社製の製品も目の当たりに見ているが「案外と大したことの無い技術であった。」と回想で述べている。あくまで人に頼らず自分で切り開いていく彼の生き方はこの時に確固たる信念となったのだろう。海外出張の目的であるズルツァー社での実習を約6か月間続けながら、図面受け渡しや発送、ゲージの注文、諸機械の見積もり収集等、夜も日も明けぬ仕事振りで欧州各地を駆け回った。さらに、会社より金属工業全般についてもっと調べてくる様指示があり、再度米国、カナダを視察し、次の正月もサンフランシスコで迎えることになる。東部の33工場の視察を終え横浜へ帰着したのは、実に1年4か月振りであった。世間は第1次大戦後の不況に入りつつあり、第1回のメーデー開催もこの年である。さて、1年半にもおよぶ海外出張の成果を浅田は420ページの「欧米出張報告」に綿密に記入した。浅田はこの出張で貴重な体験を重ね、この事が後々の経営者としての道を歩んでいく跳躍台となったわけである。

3.3 棒鋼・線材との出会い

帰国後に、新しく設けられた製鋼部の副長に就任した。満33歳である。だが、社会は不況の真っ只中であり、脇の浜(神戸市)の工場もペンペン草に覆われるといった状況であった。この時期、戦前では日本最大規模の神戸大争議が起こり、相継いで従業員はストライキに入った。こういふ中、浅田は国産セメント機械の第1号の製造を進言した。浅野セメントに納入した機械の評判はすこぶる良く、通算で36台も納入することになり、さらに小野田セメントからも受注した。副長時代の一番の業績として、後年よく語っていた項目である。

さて、いよいよ棒鋼・線材へと話が進んでいくわけであるが、まず神鋼が棒鋼生産で大きく飛躍するきっかけとなった出来事があった。当時の幹部が脇の浜にある草ぼうぼうの工場を見渡し、浅田に何とか利用方法はないかと尋ねた。この時浅田は「何故か偶然にも八幡製鐵所の線材係長を思い浮かべた。」(回想)とのことであった。その人物とは浅田が帝大3年生の夏、八幡製鐵所に実習に行った時に指導してくれた線材工場の係長であり、その後浅野小倉製鋼所の線材係長に引き抜かれたが、この時期は大阪で浪人中の身の上であった。当時の棒鋼各社の生産量は国内の需要を賄いきれず、輸入品が主体であった。かねてから浅田は、工期の長い鋳鍛鋼機械部品よりも圧延鋼材の方が遙かに会社にとって有利と考えていた。但し、輸入品と品質および価格の面で同等のものが出来ればという条件付きであった。そこで、この係長を筆頭に彼の部下である浅野小倉製鋼所の圧延熟練工も十数名一挙に採用した。棒鋼工場の建設は、大正12年9月に着手し、翌年2月から稼働を開始した。中型ローリングミル1基、粗ロール1台、小型圧延機4台、加熱炉2基が主な設備であった³⁾。試運転は順調で、19mmφの丸棒を20本圧延したが、その品質は極めて良好であった。この後、12mm～80mmφの棒鋼を順次圧延していくことになる。当初700～800トン/月であった生産量が、昭和3年には3,500トン/月の生産量となった。棒鋼工場建設中に、あの関東大震災が起こり、その復興需要で鉄筋バーが飛ぶように売れた時代であった。

次に線材進出へのきっかけであるが、大正13年に尼崎の岸本商店から中古の線材圧延機を買わないかとの話が持ち込まれ、浅田が上司の田宮に是非購入する様進言した。値段は18万円(約15億円)だった。型式はガレット式線材圧延装置と呼ばれ、2～3基の圧延機を横に並列して設置する方式である。翌年の夏から整備を始め、約1年余りで待望の「第1線材工場」が完成した(図2⁴⁾)。この当時、線材メー

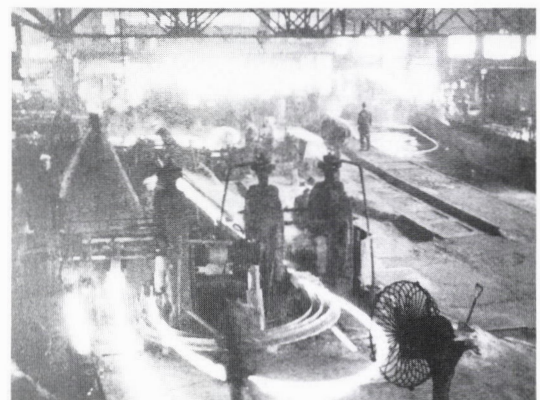


図2 第1線材工場

カは八幡製鐵所と浅野小倉製鋼所のみで、国内需要の10万吨/年の半分しか生産が追いつかず、残りは全て輸入品であった。当時の様子を田宮は、「浅田らの努力で棒鋼工場の生産が上昇の一途をたどっていた頃、線材設備を買わないかという話があった。周りからはあんな古い機械を買ってもどうせスクラップだろうと言われたが、錆ついたロールスタンドや敷鉄板などを入念に手入れし、足らずまいは自作して補った。また、熟練工を数多く雇い、無事操業を開始した。」と述べている。第1線材工場の建設中に浅田は初代の製鉄部長に昇格した。誕生日の翌日で満39歳である。この線材工場には熟練圧延工を多く配属し、73名で操業を開始した。非常に順調な立ち上がりで、3か月後には日産70トンの目標を達成した。製品のサイズは当初、棒鋼に近い太番物の8分の3インチや2分の1インチであったが、5.5mmφ(五番線)の量産には昭和4年に成功する。工場の操業は順調で、生産性の向上と加熱炉原単位の向上等、当初の予想を超えた好成績で輸入品と十分互角に戦える採算となり、「線材の神鋼」という基盤が確固たるものとなった。この様に会社の経営は世の中の不況を知らず相当活発であったが、この時、冒頭の鈴木商店が倒産するという一大事に遭遇したわけである。昭和2年の4月、浅田は田宮から呼ばれ、鈴木商店の負債600万円(約500億円)を背負うことを聞かされ呆然とするのであった。昭和不況の真っ只中であり、親会社の鈴木商店倒産のその翌日、神戸の海岸からは、石炭・スクラップ・銑鉄等を満載していた船が、まさに潮が引く様に消えていった。浅田は後に回想で「非常に残念だった。」と述べ「当時、国の援助があれば、世界最大の商社であった鈴木商店も倒産せずに済んだはずだ。」と40年後に語っている。いずれにしても、600万円の借金は残り、海岸から原料船は消えてしまい、平炉2基の操業を一旦停止した。この後、何とか田宮を中心に新生神戸製鋼所が再スタートし、浅田は取締役役に任命された。満42歳であった。

3.4 第2線材工場の建設

この後、昭和5年の春に浅田は最大の功労とされる「第2線材工場」(図3⁴⁾、⁴³⁾の建設プランを策定し社長に提出している。総額160万円(約130億円)の巨額な計画であった。当時、会社の1年間の利益が130万円の時である。浅田はこの時色々と新規事業を考え、自動車生産も視野に入れていた模様である。だが、最後には一番自信のある線材の新工場建設に考えが固まった。この壮大な計画は、当時の取引先である台湾銀行からの強烈的な反対もありなかなか前には進まなかった。すったもんだの挙げ句ようやく新線材工場の建設は決まったが、どこのどんな設備を設置するのかということもあり、発案者である浅田が急遽、海外出張することになった。2度目の洋行はクリスマスの日に横浜港から出発した。まず米国シアトルへ到着し、パシフィック・コースト・スチール・コーポレーション社を訪ねた。ここはコンクリートバー主体の会社だが、200キロのインゴットを使用しており分塊工場が無かった。その後、本命であるドイツのクルップ社およびデマーク社を訪ねた。浅田はこの2社からクルップ社を選んだが、その理由を回想で次の様に述べている。「デマーク社の線材圧延機は総連続式圧延機で速度も速かった。ただ、当時デマーク社の機械を据え付けた工場がトラブル続きで、1年間ぐらい調整が必要とのことであった。我が社は今ぎりぎりの状況であり、ここで最新式の設備を導入しても立ち上げに時間が掛ければ危急存亡の危機となる。そこで、少々旧式だがクルップ社を選択した。また、帰りにクルップ社の圧延ミルが入っているラインハウゼンの工場を見学したが、ここも200キロのインゴットで分塊工場が無かった。そこで、余分な資金のない神鋼で、いよいよ分塊工場の建設を省くことを腹に決めた。」ここで、クルップ社を選んだこと以外に、浅田の思わぬ会社への貢献として、購入を円建てで契約したことが挙げられる。線材圧延機35万マルク(日本円で35万円)で決着したが、その後の急激な為替変動によりマルク建てな

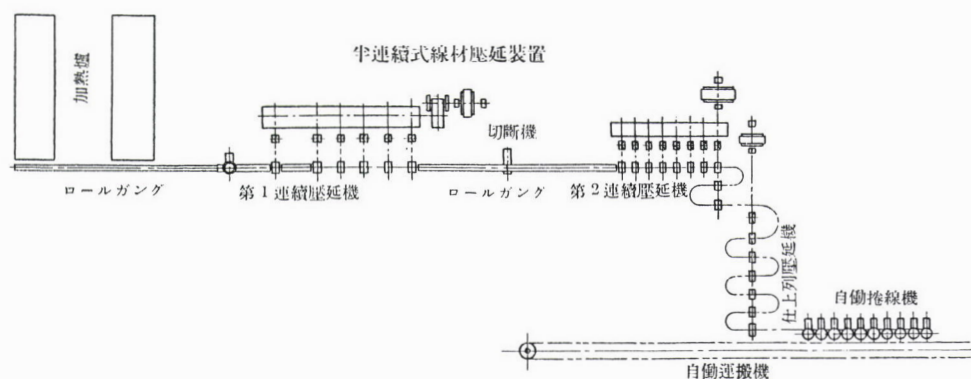


図3 第2線材工場

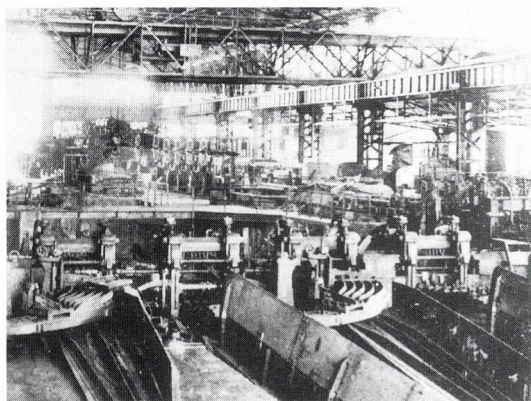


図4 第2線材工場

らば40～50万円の買い物となっており大損するところであった。

いよいよ第2線材工場の建設を開始するわけであるが、会社の創立記念日に合わせて昭和7年9月1日からとした。建設に際してクルップ社から3名の技師が来日して指導したが、この半連続式圧延機は当時の日本では画期的なものであった。なお、受線装置は技術見習いである宮下俊二(後の日本高周波社長)が考案したものを採用した。昼夜兼行の突貫工事が続き、さらに懸賞金まで付けてその工期短縮を図った。線材設備は、ガス発生炉と連続加熱炉が各2基、ローラーテーブル、粗連続圧延機(6基)、切断機、中間連続圧延機(10基)、仕上列圧延機(6基)、自動捲線機が主な設備である³⁾。操業方法はほとんど現在と同じで、1,200℃に加熱した150mm角のインゴットを使用していた。待望の第2線材工場の操業開始は翌年4月である。この圧延を担当した圧延工50名は全て素人であった。これは、第1線材工場が全て熟練工を採用した点とは大きく違っていたが、事前に10か月間にも及ぶ徹底した訓練を実施しており、結果的にこの事が工場を順調に立ち上げる一因となった。第1線材工場のガレット式に比べて、能力は2～3倍、燃料は7割、圧延工の賃金は半額ですんだ。4月は1直で4,800トン/月であったが、半年後には2交代で7,000トン/月まで拡大した。次の年には1万トンを超えるまでになり、さらに線材ブームで製品価格も65円/トンから210円/トンと3倍に跳ね上がり、まさに神鋼のドル箱となった。またこの頃、第1線材工場ではワイヤロープ用の硬鋼線の試作にも成功した。未だ分塊工場がなく、60カーボン以上の特殊鋼を160キロのスモールインゴットで造塊していたが、これを5.5mmφの線材に圧延して、捻回数も13回という外国製品の水準にも十分対抗出来る品質であった。当時の我が国の年間線材生産量は、関東大震災までがほぼ3万トンであるが、その後6万トンまで増加し、昭和8年にはなんと30万トンまで急速に拡大していった時代である。

3.5 戦時非常体制

昭和9年の8月、神鋼5代目社長に田宮が就任し、浅田は常務取締役となった。同時に会社も創立30周年を迎え、新たな出発の年となった。この頃の世相としては、2年前に「五・一五事件」、その翌年には「ヒットラー内閣成立」、さらに3年後には「二・二六事件」が起り、戦争へと世の中が動き出していた。また、鉄鋼業界では昭和9年1月に八幡製鐵所を中心として6社が合併し日本製鐵(株)が設立された。この様な中、浅田は高級特殊線材のより一層の品質向上を図るため、昭和12年9月から分塊工場の建設に着手した。建設費用は約38万円であったがこの工場の完成で、製鋼～分塊～第2線材工場の系列となり、当時世界最優秀であったベスレーム社の硬鋼線に対抗し得る品質レベルを確保した。一方、戦時需要は益々高まり、特に航空機の生産に欠かせない軽合金製造を目的に、長府工場の建設にも着手した。建設費用は当時の資本金をも上回る莫大なものであったが、浅田の東奔西走により無事操業を開始した。やがて、昭和16年12月8日の真珠湾攻撃から日米開戦となり、昭和20年8月15日の終戦まで、4年間にも及ぶ太平洋戦争の時代となる。会社も軍需産業に傾注していき、戦艦大和や戦艦武蔵の12トンもの超大型錨も製造した。戦争は増々激しくなっていたが、会社は日本全国に22工場を有し、社員は7万人を超える創業以来の最大規模になっていた。そして、浅田は焼け野原となった神戸の街で終戦を迎えた。

4 第6代および第8代社長時代

戦争は終わったが、会社も世の中も混乱の真っ只中の時に浅田が第6代目の社長に就任した。満58歳であった。戦争中、5基稼動していた平炉の火も消え、社員も1万人弱になった。戦後の土木建設用復興資材として線材およびセメント機械に、交通機関の復興用として車両部品や電気モータに、食料増産用として肥料製造用機械にそれぞれ特化して13工場での再出発であった。浅田社長の方針として、「生産品は消耗品でなければならない」があり、まず線材の生産から再開した。第2線材工場は社員の必死の頑張りで、業界のトップを切り11月初旬から生産を再開した。終戦からわずか2か月半である。この月は普通線材40トン、翌月は880トンと、原料調達を始め大変な時期に順調に生産量を回復していった。この様な中、GHQの日本経済改造工作は激烈を極め、神鋼も分割されることが決定した。また同時に、全国の主な企業の幹部が続々と公職追放に近いとのことで辞任していった。浅田も昭和21年12月に社長を辞任した。この年の第2線材工場の生産量は、22,220トンで

あった。次の年、浅田は満60歳の還暦を迎えたが9月に公職追放となった。しかし3年後には公職追放を免除され、これ以降、関係各社の幹部に復帰していく。追放解除となった翌月に神鋼相談役となり、高砂にある旧大阪造兵廠播磨製造所の5,000トンプレスを見に行った。そして「すぐに社長の町永を呼び付けて高砂を貰い受けろと叱りつけた」(回想)と言う程、この工場には相当な熱の入れ様であった。即日、高砂の払い下げを申請し、昭和28年10月に「神鋼高砂工場」が開業した。

さて田宮の決定で、浅田が第8代の社長に復帰することになった。ここで浅田は社は「誠実・勇気・健康」を提唱するとともに就任早々に、「食糧政策確立の急務と甘藷・馬鈴薯の常食化を提唱す」と題する論文と、「日本鉄鋼業安定策」という論文を発行した。これらはパンフレットに印刷して、広く世の中へ訴えたものであり内容も大学教授や経済評論家顔負けの大論文であった。さらに、「わが国機械工場の陳腐、老朽化について」という論文も発行した。昭和29年11月には尼崎製鉄(株)の取締役役に就任し、念願の鉄鋼一貫体制に一步を踏みすことになった。当時、高炉を保有する製鉄会社は、八幡、鋼管、富士、中山、住金、川鉄であり、神鋼は第7番目に入った。ちょうどこの時、住金は小倉に、川鉄は千葉に大製鉄所構想があり、神鋼も神戸市の灘浜に高炉建設の要望が若手技術陣から絶えず発せられていた。さらに平炉・圧延メーカーの(株)尼崎製鋼所の経営も銀行から頼まれ取締役役に就任する。その後、紆余曲折を経て、遂に昭和32年1月に灘浜工場建設委員会の設置をもって、高炉を有する鉄鋼一貫製鉄所の建設を決定した。そして4月からいよいよ灘浜地区の埋立て工事に入った。この工事は御影の天神山(神戸市)を削った土砂で埋め立てるといふ、後の神戸ポートアイランド建設方式の先鞭となったもので、当時の新聞にも「六甲山を削って大阪湾を埋め立てる」と大々的に取り上げられた⁴⁾。



会長・相談役時代

浅田満71歳の時、社長を後輩に譲り自らは会長となった。灘浜の工事は順調に進み、昭和34年1月16日に待望の第1高炉の火入れ式を実施した。これまで何度も高炉建設の話があったが、今回ようやく実現したことで浅田の胸中やいかばかりであったか…。翌年の4月には「(社)日本鉄鋼協会会長」に就任した。当時の鉄鋼協会は規模が小さく、鉄鋼業の学術技術の進歩発達に向けた基盤作りの途中であったが、浅田は学会基礎の確立が鉄鋼業発達の原動力と考え、

協会規模を拡大し活動を強化するためあらゆる方面に尽力した。この時の功績を称え、後の昭和46年「浅田賞」として、その名前を深く刻むことになった。賞と言えば、フランスからも勲章を授与されることになった。この時、浅田満79歳であるが、神鋼相談役をはじめ主要な役職は30を越えていた。あの日本万国博覧会の理事もその一つであった。相談役となっても浅田の仕事への情熱は止まるところを知らず、まさに土・日も無い仕事振りであり、当時の秘書役を大いに困らせたとのことであった。食べ物ではうなぎが大好物であり、3日を空けずうなぎを所望した様である。ただ、これ程元気な浅田も老齢には勝てず、ついに昭和45年10月21日に83歳で天寿を全うした。生前の功績により、従三位勲一等瑞宝章が授与された。

亡くなる2年前に、日本鉄鋼協会「俵賞」(ゴールドメダル)を受賞したがその記念講演で、浅田は製鉄プロセスを集中自動制御するという夢の実現や、直接製鉄法の推進あるいは耐火材料の改善を説き、スーパーメタルの発想にも言及している。また世界トップの鉄鋼業界でも常に創意工夫と努力なくしてその地位を保ち得ないと次の様な警鐘を鳴らしている。「今やわが国の鉄鋼業は生産、設備、技術、研究開発体制など世界のトップレベルにあると言えます。しかし、わが国を取りまく国際環境は必ずしも予断を許さないものがあります。…(中略)…日本のこの国際的優位を維持しかつさらに将来への発展を遂げるためには格段の創意工夫と努力とを必要とするものと考えます。」⁵⁾ 30年以上も前の講演であるが、今でも鉄鋼業に対する浅田の熱き想いが伝わってくる言葉でもって浅田長平の人物史を終えたい。

注) 鉄の人物史シリーズの題目は敬称を略させて頂きます。

参考文献

- 1) 鉄鋼巨人伝 浅田長平, 鉄鋼新聞社, (1982)
- 2) 神鋼タイムス87, (株)神戸製鋼所, (1953)
- 3) 浅田長平: 本邦線材製造の發達, 鐵と鋼, 21 (1934), 435.
- 4) 神戸製鋼八十年, (株)神戸製鋼所, (1986)
- 5) 浅田長平: 日本鉄鋼業の回顧と展望, 鐵と鋼, 54 (1968), 1089.
- 6) 神鋼三十年史, (株)神戸製鋼所, (1938)
- 7) 神鋼五十年史, (株)神戸製鋼所, (1954)

(2000年3月23日受付)